



吉川英梨

小説を書くということは、0を1にする作業です。まっさらなキャンバスにどう構図を立てるのか、背景は何色か、中心にはなにがあるのか。1を2や3にして最終的に10にする作業……小説でいうところの推敲ですが、これもまあ場合によっては非常に難儀な作業ではあるのですが、なにより大きなハードルはやはり0から1の作業です。

なにをどう書くのか。「海上保安庁の小説を書いてほしい」と言われたとき、まず私の頭に浮かんだのは「海上保安庁のことを何も知らない」ということです。全国を11の管区に分けていることも知らなかったし、巡視船と巡視艇があるのも知らない。保安部と保安署があ

海保のおかげで取材でき「書きたい」が大爆発

ることもわからない。ぼんやり知っているのは『海猿』だけ。

私は警察小説というジャンルの書き手です。警察という組織は昨今の刑事ドラマの流行りだったり、私自身の親類に警察官が多くいたりする関係で「そもそも組織図を知っていた」状態で、初めて警察小説『アゲハ』を完成させました。知っていたということが、0から1の作業を非常に楽にしていた部分はあったと思います。

なにも知らない、というのはつまり、なにを知らないのかを知らない、ということです。物語を作るという側面から言うと、『海保のなにをどう勉強すれば小説として面白い題材にありつけるのかがわからない』。

実はこの状態からスタートするというのは、作家に大きなプレッシャーがかかります。

実際の執筆準備に入ったのは

「海蝶」と初めての警察小説「アゲハ」



2019年の12月で、プロットは翌年1月に完成、第1稿を書き終えたのは2月ごろでした。これは、初めて書く組織を題材にした小説にしては相当な速さで完成したと言っていると思います。書いている間、ほとんど迷いも悩みもありませんでした。当初は、題材の決定、構成表、プロット、第1稿の完成まで半年はかかると読んでいたので、自分でもびっくりの速さでし

たのは、まだ何も企画が固まっていない段階から「あそこを見たらどうか」「ここは役に立つと思うよ」と、海上保安協会の宮野直昭常務があちこち連れて行ってくださったおかげです。また、その取材先で現場の海上保安官の方々が温かく迎えてくださり、「なにを質問すればいいのかもわからない」状態の私に親切に業務説明をしてくださったのも大きいです。

た。

(通常の警察小説も、私の場合はプロットから第1稿まで、2カ月～3カ月ほどです)

ここまで執筆がスムーズに進ん

だいたい私は年間で4、5作の作品を書きますが、スケジュールが詰まっているので、依頼をいただいてから1～2年は待つていただくのが通常です。取材も題材が決まってから動き出すのですが、別の警察小説を書きながらあちこち取材に連れていってもらい、「早く書きたい!」という意欲を燃やしていたのも、プレッシャーをはねのける大きな力になったと思います。「あと3本書いたら海保小説」「あと2本」「あと1本」と指折り数え執筆のときを待ちました。やっとたどり着いたときには、その間にため込んだ「書きたい」が大爆発して、あっという間に完成になった気がします。

次回以降、執筆前に取材をさせていただいた羽田特殊救難基地、羽田航空基地、海上保安試験研究センターの話などをしていこうと思います。

(つづく)

次回から羽田特殊救難基地、羽田航空基地、試験研究センターも